

---

## アンリ・マティスによるネルソン・ロックフェラー邸のための暖炉装飾をめぐる一考察

小野 愛莉 (早稲田大学)

---

アンリ・マティス (Henri Matisse, 1869-1954) は、絵画だけではなく詩集挿絵や舞台装飾、ステンドグラスなど多種多様な注文を受け、フランス国内外に多くの顧客を抱えていた。マティスのコレクターに関する先行研究では、特に壁画《ダンス》を注文したアルバート・C・バーンズや、膨大なマティス・コレクションを持つコーン姉妹に焦点が当てられてきた。しかしバーンズは壁画の注文以降マティスの作品をほとんど購入せず、コーン姉妹は既存の作品購入にとどまり新たな作品の制作を依頼することはなかった。これに対しネルソン・ロックフェラーは、自邸のための暖炉装飾やユニオン教会のバラ窓のデザインをマティスに注文していたにも関わらず、これらの作品やマティスとロックフェラー家の関係については十分な研究がなされていない。本発表では、この暖炉装飾作品をめぐるマティスとロックフェラー家の関係に注目し、本作がマティスにとってどのような意味を持つかを主題と作風から考察する。

まず初めに、ロックフェラー家とニューヨーク近代美術館 (以下、MoMA) の関わりから、一族とマティスの関係を検討する。ロックフェラー家は MoMA へ多額の寄付をしており、同館初代館長であったアルフレッド・H・バーJr.の助言をもとに作品を購入することが多かった。一族が購入した作品は MoMA へ寄贈されるのが通例であり、実際にマティスによる暖炉装飾作品もネルソンの存命中にすでに MoMA へ寄贈されている。マティスは名の知れた美術館に自身の作品が所蔵されることを望んでいたため、これがいずれ MoMA に寄贈され米国における自身の評価を後押しすると当初から予想していたと考えられる。

この暖炉装飾作品は「詩」を主題としたもので、画面には詩を読む1人の女性とそれを聞く3人の女性が配置されている。マティスは暖炉を囲う曲線の枠組みと呼応させるように、女性たちを緩やかに波打つ曲線によって描いた。このような画面いっぱいに広がる簡潔な線描による表現は、画家が1930年初頭に《ダンス》や「マラルメ詩集」の挿絵制作で生み出した一つの到達点であったと言える。しかし1930年代マティスに舞い込んだ商業目的の注文の多くは主題が指定されていたこともあり、この曲線的線描を十分に活かす機会は少なかった。そうしたなか、画家自身で主題を決めることができた暖炉装飾は、自由な主題を、新たに確立した線描で表現する貴重な機会であったと解釈できる。

このようにマティスにとってネルソン邸のための暖炉装飾は、米国における自身の評価につながる注文であると同時に、1930年代初頭に見出した新しい表現を大作によって実現する好機であったと考えられる。